杜海樹の映画紹介

ドキュメンタリー映画
「桃色のジャンヌ・ダルク」
3月27日より公開

イラクに対し武力攻撃が開始された2003年、突如、ピンク色の衣装で身を飾る反戦アート集団「桃色ゲリラ」が登場した。「ワールド・ピース・ナウ」や各種の反戦デモなどにも参加、朝日新聞の一面を飾ったこともあったので、ご存じの方も多いのではないだろうか。その「桃色ゲリラ」を主宰した、画家・増山麗奈を追ったドキュメンタリー映画がこのほど完成した。

桃色ゲリラといえば、ミニスカートやビキニ姿、時にはセミヌード姿で登場し「悪い大人にパンチをお見舞いするぜ！桃色ゲリラパ～ンチ！」と叫ぶ反戦パフォーマンスなどで有名だが、若いママやチビッコたちの間で結構人気を集めているようだ。しかし、その一方「理解不能…」という声や「売名行為」ではないかと揶揄する声も少なくなく、意見は分かれているようだ。だが、増山さんは「売名行為と言えば売名行為かもしれないが、名前が広まれば多くの人に知ってもらえる」と言い、「戦いよりエロ！」と主張し続けてきた。「日本では裸かどうか…ということで騒いでばかりいるが、武力攻撃が悪いと何故言わないのか？原発が悪いと何故言わないのか？そのことの方が余程問題ではないのか？」と問題提起を続けてきている。その姿は、どこかジャンヌ・ダルクを連想させるところもある。

そんな増山さんは、現在、二人のお子さんの母親でもある。9・11事件が起きたときに「子どもたちの未来はどうなるのだろうか？」と非常に不安に駆られたという。そして、「生命を大切にしたい、人間として当たり前のことを訴えていきたい、画家としてできることをしたい」と日頃の活動をおこなっている。

近年、拳を突き上げての「団結がんばろう！」などは古くさいと言われているが、桃色ゲリラが「桃色ゲリラパ～ンチ」と拳を突き上げると、新鮮に感じられるから不思議というものだ。桃色ゲリラパンチも、団結がんばろうと行動様式としては大差ないと思うのだが。問題は、行動様式ではないのかも知れない。

桃色ゲリラは、反戦アート（芸術）集団と名乗っている。アート（芸術）の捉え方というものは人様々だが、増山さんは岡本太郎現代芸術賞で入選するなど、どちらかと言えば故・岡本太郎さん寄りのアーティストであろう。岡本太郎さんの著作には「本当に生きがいをもって、瞬間瞬間に自分をひらいて生きているかどうか」という言葉が残されているが、岡本太郎さんは芸術を人間の生き方そのものと捉えていたようだ。「芸術は爆発だ！」とは、自分自身をパッと開いていく、挑んでいく、それが人生であり、芸術なのだと。

日本では、音楽や踊りは、いわゆる〝鳴り物〟として何かのオマケの様な扱いしかされない場合が多いが、そんな有様では既存のデモ行進

のアピールに説得力が無くても当然なのかも知れない。桃色ゲリラのパフォーマンスは、既存の鳴り物文化に殴り込みをかけ、過去の遺物ではない、若い女性層の現代の苦悩を素っ裸な気持ちでぶつけてきているのではないだろうか。

「桃色のジャンヌ・ダルク」

3月27日（土）より、渋谷ユーロスペースにてレイトショー（連日夜9時上映）

監督／鵜飼邦彦

出演／増山麗奈　他

製作：ジャンヌ・ダルクプロジェクト

配給：アルゴピクチャーズ2009年／1時間45分

http://www.momoiirojeanne.com/